■クランケ野中さんの疑問とお願い

1 オーディオから離れて長いブランクの後に、雑誌やインターネットで情報を集めて、現在のシステムを構築してきましたが、いま出ている音でいいのでしょうか？
2 オーディオ機器を収納しているラックの裏でケーブルがこんがらがっています。もっとすっきりできないでしょうか？
3 部屋の左右の音響条件が違うがそろえる方法はないのでしょうか？
4 ホームシアター用にそろえた現在のシステムで音楽を聴くと不満です。部屋のインテリアを壊さないようなデザインでオーディオとAVの両方を高品位に再生できるシステムはないのでしょうか

スクリーンの収納も協栄不動さん

ソフトを取りにハシゴに登った潮さん

がるための階段が見当たらない。「野中さん、ソフトはどうやって取りにいくんですか…？」けげんそうな顔で問い掛ける潮さんに、野中さんがスクリーンの左側の壁を指差しながら答える。「そこのハシゴを、見たいソフトの前に立てかけて登るんですよ」確かに部屋の左手の壁にハシゴが立て掛けられている。「このハシゴを置れなくなった時がホームシアターをあきらめる時ですかね」。多分当分くらいまでは大丈夫だと思うんですけど…これが冒頭、車中で野中さんのおっしゃっていた「10歳までシアター」の意味だったのである。

野中さんは30年来のオーディオファイルである。アナログ方式による4チャンネルオーディオを楽しまれていたそうで、マルチチャンネルオーディオへの移行もやかった。だが、そのオーディオライフに空白期間が生じる時がくる。子供がよだれをたらしながら、カートリッジで遊んでいるのを見て、これではオーディオを楽しめるのは無理だと思いました」

しばらくオーディオから遠ざかっていた野中さんが再びこの世界に戻ってきたのは、DVDが発売された1996年のことだった。

野中さんの視聴システムは別表の通りだが、中でも注目されるのが、バードランドのD／Aコンバーターとロジャースの真空管アンプだ。いずれも、CDで音楽を聴くために後から加えられたものだ。この辺りに一度ブランクがあったとはいえ、長年のキャリアが

ADKとTADのラックに納められた野中さんの視聴部。バードランドのDAC、ロジャースの真空管プリメインアンプの存在に、オーディオマニアを自認する野中さんの音に対するこだわりを表している。

■野中さんのAVシステム

■DVDプレーヤー	東芝	SD9220
■BSハイビジョンチューナー	パナソニック	TU-BHD100
■ビデオレコーダー	ビクター	HV-DH5000
■VTR	シャープ	VS-ES208
■AVアンプ	デノン	AVC-A1SE
（AAC対応にグレードアップ済）		
■メインスピーカー	B&W	ノーチラス803
■センタースピーカー	B&W	HTM-2
■リアスピーカー	リン	5150+専用スタンド
■リアエフェクト	リン	天井埋め込み式スピーカー
■サブウーハー	ヘロダイン	HGS-12
■プロジェクター	ソニー	VPL-VW10HT
■スクリーン	キクチ	シアターグレイ(80インチ)
■オーディオ用パワーアンプ	オンキョー	M506
■オーディオ用プリメインアンプ	ロジャース	E-20a(改造式)
（Tuned by 潘基郎）		
■CDプレーヤー	フィリップス	LHH300
（トランスポートとして使用）		
■オーディオ用D／Aコンバーター	バードランド	Odeon AG
■オーディオ用ニアフィールドスピーカー	ALRジョーダン	Entry S

ホームシアターを楽しむ時に視聴位置の前に取り付けられた巻き上げ式のスクリーンが下ろされる。画面以外には、自宅に映して見る時もあるという、スクリーン上部にソフトの収納用がある。左側に見える台はソフトを取るための台。

第5回

HaruoとTakeshiの ホームシアターWクリニック

今回の訪問先は事務機器メーカーにお勤めで神奈川県にお住まいの野中雅博さんだ。「私のところは70歳までシアターです」最寄の駅まで出迎えに来られた野中さんが車中でこう語られた。「えっ？　70歳までシアターって何ですか？」という問い掛けに野中さんがにこやかに答える。「見ていただければ、すぐ分かりますよ」と。

ドクトル 潮 晴男

ドクトル 山本剛士

今回のクランケ 野中雅博さん

（上）スクリーンを下ろした状態の野中さんのシステムの全容。普段は、写真にはダイニングルームとそれにつづく和室がオープンスペースとして使われている。

（右）スクリーン上部にあるソフト収納スペース。ここにたどり着くには、システムの後部の壁にかけられてはしごを登ってソフトの収納棚から取り出さなければならない。このため、ソフトは整理と整頓されて収納されている。収納スペースの手前には2スペースある。当初キャットウーク（通路）、そこからハシゴでソフトを取ることも考えられたそうだが、将来的なソフトの増加に合わせてはしごを立て掛ける場所を変えていくとのこと。

「70歳までシアター」

東海道線と横須賀線、それに京浜東北線が乗り入れるJR大船駅前の賑やかな通りを過ぎ、少し奥まった閑静な住宅街の一角に野中さんのお宅がある。家に着くと笑顔の素敵な美人の奥様と愛犬ロビンが出迎えてくれた。玄関を入ってその脇の階段を上がると、そこにリビングルーム兼用の野中シアターがある。傾斜のつけられた天井は、後方からスクリーンに向かって高くなる設計。部屋の右側はキッチンとダイニングルームだが、この間にはドアや扉は切りはない。また大きな窓が多いことからも開放的な空間が実に心地いい。

キッチンとダイニングとリビングルームの間にはロール・スクリーン式の白いカーテンが目隠しとして使われているが、このカーテンは遮光に関しての対策が施されていないごく普通のタイプ。野中さんはリビング兼用のシアタールームを生活の場としても考えているので、ここでは心地よさが優先されているというわけである。シアター用として使われることの多い隣の遮光カーテンは部屋の雰囲気に合わないので、問題があることを理解した上で、現在のカーテンを選んだそうだ。

部屋の中をぐるっと見渡すと、スクリーンの上に階段と somethingているソフトを発見。しかしそこに上